



北海道の輝く農村づくり 活動事例集



今こそ
地域力が
試される
とき

北海道農政部

北海道の農村地域は、人口減少や高齢化に伴い、農業生産の減退やコミュニティの活力低下が懸念されています。

このような中、今こそ地域力を発揮しようと、地域づくりを支援する国の事業を活用するなどして、都市と農村との交流などを進める活発な活動が全道各地で展開されています。

そして、北海道には全国に先がけて、平成21年「北海道農山漁村地域力ネットワーク」が立ち上がり、毎年、研修・交流会を開催するなど、活動団体相互の情報交換や連携した取組の促進を図っています。

今回、このネットワーク組織の協力を得て、道内において特徴的な取組を行い、成果を上げている活動団体について、その活動内容を聞き取るとともに、地域づくりリーダーの思いを執筆していただき、事例集を作成しました。

本冊子には、活動のノウハウやヒントが詰まっていますので、どうかそれぞれの地域で参考にしていただき、農村地域の維持・活性化に向けて、地域力が発揮された活動が全道に広がっていくことを期待するものです。



CONTENTS

3 3	農村の魅力ある資源を活かしたフットパス 黒松内町農山村資源活用地域協議会（黒松内町）
2 7	住み慣れた土地で安心な暮らしづくり 西神楽エコ農村共生対流推進協議会（旭川市）
2 1	小さな農業（放牧養豚）の試み 鹿追町地域資源活用ふるさとづくり協議会（鹿追町）
1 6	廃校を活用した交流拠点づくり 当別町田園文化創造協議会（当別町）
1 0	子どもブランドという名の食農教育 食を考える協議会（興部町）
4	北海道の里山づくり 栗山町ふるさと交流産業推進協議会（栗山町）





子どもたちの里山見学



北海道の里山づくり

栗山町ふるさと交流産業推進協議会（栗山町）

国蝶オオムラサキの生息で知られる栗山町。

昔懐かしい田園風景が郷愁を誘う町だ。

ここでは、子どもたちに独自の自然体験を軸としたふるさと教育が行われている。

自然と共生する町栗山

「ふるさととは栗山です」。この優しく響く合言葉に、町が目指す栗山の姿がイメージできる。確かに、栗山は農村の温かな雰囲気と、なぜか懐かしい「ふるさと」の原風景が残る町だ。水田を中心に、玉ねぎや馬鈴薯なども栽培されている田園地帯。その名の通り、昔は多くのシバグリが自生していたが、自然淘汰され少なくなつた。しかし、最近町では栗山の特産品づくりのため、栗の木を植栽し、栗の栽培に力を入れ出してきた。

町のランドマーク的な存在に、御大師山という貴重な自然が残る山がある。この山で昭和60年の夏、国蝶オオムラサキが発見された。オオムラサキは石狩低地帯の限られた雑木林に生息しているが、この新しい発見で栗山町が

北東限の生息地になつたのである。オオムラサキは栗山に環境保全の大きなうねりをもたらした。人と自然とが共生する町づくりへと舵を切ることになつたのである。

町民が主役の環境保全活動

町民が動いた。オオムラサキの幼虫の食樹であるエゾエノキの幼木約500本を町内の170世帯で育て、御大師山に移植するという活動を展開した。まさに、「エゾエノキの里親制度」である。これは、オオムラサキが何世代にもわたり、末永く栗山で生活してもらうための活動だ。オオムラサキの幼虫は、エゾエノキの葉しか食べない。エゾエノキが多くなければなるほど安心して繁殖することが可能になる。50年、100年先を見通し



牧歌的なハサンベツの風景



手仕事で光る魚道づくり

た活動である。さらに、町民活動の輪は広がり、野鳥の観察と生息環境づくりに取り組む「おっ鳥クラブ」、地元の植物への関心を持ってもらう「植物観察会」、水環境の再生を進める「ウォーターリフォーラム会」など、様々な会が立ち上がった。そして、平成5年、それぞれの会の連携を深め、自然を次世代につなげていくことを目的として、「栗山町いきものの里づくり推進協議会」が結成されたのである。そんな中、かつては農村地域であったハサンベツ地区を再生しようという動きが起こってきた。

ハサンベツ里山づくり

20年計画

御大師山の裏手にあたるハサンベツ地区。ここは、小河川ハ

サンベツ川の流れに沿って続く、雑木林に囲まれた細長く開けた土地だ。昔は、水田が営まれていたが、農業の大規模化の波に押し流される形で、農家は狭い土地を離れ次々に離農していった。次第にハンノキやヤナギ、セイタカアワダチソウ、ヨシなどが生い茂る荒地になった。ハサンベツ川も、コンクリート三面張り水路に変わり、水辺の生き物たちもいつしか姿を消し、荒れ果てていった。「この川をホタルのすめる川に復元しよう。トンボやドジョウがすみ、人と自然と農業が共生するふるさとの環境を取り戻そう」、「ハサンベツ地区を再生し、ここに子どもたちが安心して遊べる川と森をつくりたい」。こんな町民の要望を受けて、平成11年、町はこの離農跡地をふるさと自然財産として購入した。面積は約

24ha。ここから、ハサンベツの自然環境の復元を目的とした里山づくりがスタートする。この里山づくりは、町民自らの手で取り組むことを原則とし、いきものの里推進協議会の他、青年会議所、老人クラブなど様々な組織が参画し、「栗山町ハサンベツ里山計画実行委員会」が立ち上がった。コンセプトは、町民が主体となって子どもたちに里山の自然を守り、里山の資源を活用させてもらう文化を伝えていくこと。実行委員命名のプランを童謡の歌詞になぞらえて、「童謡が見える里山づくり」という「ハサンベツ里山づくり20年計画」が作成されたのである。

童謡の舞台となる里山づくり

まずは、「春の小川さらさらプロジェクト」。これは、子どもたちが



遊べる「春の小川」をつくり、また、ハサンベツ川に設けられた高さ1〜2mの落差工を改修して魚が上れる「魚道」をつくるもの。「春の小川づくり」では、本流から小川を引き、石を組んで瀬や淵をつくった。完成後もなく、ウグイの群れやイバラトミヨ、スジエビなどが確認された。「魚道」づくりは、段差があり魚が上れない落差工に、玉石を階段状に積み上げ、水が石の間を流れ落ち魚が遡上できるように、スロープをつくった。これらの作業は全て実行委員会の手弁当。老若男女が一列に並び、玉石を手渡しで運び、一つ一つ丁寧に組んでいく。皆、童心に返ったようで、とても楽しく作業を進めたという。

を造成し、トンボのヤゴなどの棲み家を増やす活動だ。水深などが異なった多様な水辺をつくることにより、水辺の形態により棲み分けしている多くの種類のトンボを育むことができる。結果としてオニヤンマなど、普段なかなか見られないトンボが舞い飛ぶようになった。そして、「ミズバショウの花が咲いているプロジェクト」。これは、小沢から水を引いて湿地をつくり、そこにミズバショウの種から苗をつくり移植するもの。湿地の復元だ。現在、春になるとミズバショウ等の花が訪れる人たちの目を和ませる。この湿地は、水質浄化の役割も果たす。

じみのない里山が栗山の地に見事に出来上がっていったのである。

農と自然の学習

ハサンベツ里山では、農業や自然を体験する様々な活動が行われている。子どもたちとの体験学習の一コマを紹介すると、ドジョウやカエルが棲む水田で子どもたちは生きものと触れ合いながら、田植えやヒエ抜きをする。水田はドジョウや水生昆虫が遡上し繁殖できるように造成してある。ドジョウは春から夏の繁殖期になると、川を上り水が温められた水田まで上がって産卵する。それだけ、水生生物のすむ川と米をつくる水田は密接なつながりがあるのだ。自然と農の関係について学ぶ機会はなかなか得られるものではない。



い。ここハサンベツ里山は、専門知識を有する実行委員会のメンバーから、それを興味深く教え伝えてもらうことができるフィールドなのである。

そして、これらの活動をステツプアップするため、農水省の地域づくりの支援事業を活用し、町やハサンベツ里山計画実行委員会、雨煙別小学校コカ・コーラ環境ハウスを運営するNPO法人雨煙別学校、グリーンツーリズムに取り組む団体などが参画し、「栗山町ふるさと交流産業推進協議会」が設立された。この協議会は、ハサンベツの里山などを活動の場として、札幌等からのモニターツアーを開催したり、町内外の学校の子どもたちや教職員を対象とした体験教育を実施したりするなど、様々な活動を展開した。それにより、地域の子どもたちのために行ってきた活動が同時に、都

市農村交流にとつても重要な意義を持つていることを認識できたことは大きな成果であった。

これからの里山ハサンベツ

ハサンベツ里山は、農と自然を学ぶフィールドとして大きな効果を上げていく。また同時に、オオムラサキやヘイケボタル等のいきものたちの石狩平野東部の重要な生息地として将来に向けて保護され拡大していく道筋が確保されつつある。

今後は、栗山町に広がる農村・農業地帯の都市農村交流の窓口として、廃校をリニューアルした自然と農業体験の宿泊拠点施設雨煙別小学校コカ・コーラ環境ハウスの体験学習フィールドとして、この里山が人と自然との共生、そして、農と自然との共生を考える価値ある場とし

て、さらに充実していくことだろう。



赤い壁がまぶしい雨煙別小学校コカ・コーラ環境ハウス

地域リーダー
からのひとこと

子どもたちが栗山で育ったことに誇りがもてる街づくり

栗山町ふるさとと交流産業推進協議会 事務局長 高橋 慎

自然を守ることは、

ふるさとをつくること

オオムラサキが発見された当初、その生息地御大師山を「観光地として開発するか、それとも生息地を保護するのか」の論議になった。話し合いを進め、「開発か保護か」で対立するのではなく、「自然を守ること」は、ふるさとをつくること」の視点で整理し、わずかに残るオオムラサキを守り育てていくことを提案し活動してきた経緯がある。

栗山には知床や大雪山等の貴重な自然や風光明媚な景勝地があるわけではない。どこにもある野山と田畑が広がる農業地帯と夕張川である。そこに、栗山特有の風土を象徴とする北東限のオオムラサキの棲む雑木林を大切に守り育て、森を広げ豊かにしてきた。後世の子どもたちのための未来へ

続く自然財産という「ふるさと教育」のフィールドとして、英断し残してきたことを忘れてはならない。

30年間、町民が手をつなぎ

広がり続けてきた活動

この御大師山のオオムラサキの保護活動から始まり、いきものの里づくり、ハサンベツ里山づくりへと繋がりが、さらに、道内最古の二階建て木造校舎のひとつである旧雨煙別小学校を自然・農業体験の宿泊施設として再生させ、そこを拠点とした活動を種々工夫し豊かに展開してきた。町民が手をつなぎ、地域の自然や風土、歴史や文化をきちんと探り把握し、宝物を発掘し積み上げながら、街の身の丈にあった地に足をつけた活動が30年間も一貫として続いてきているのである。





とうとう夕張川にサケが戻ってきた



サケの稚魚をみんなで放流

栗山の大地をつくり恵みを運んできた 夕張川に恩返しをする

栗山に広がる農業地帯では、夕張川がくつった大地の特性にあわせて土地利用がなされてきた。夕張川沿いのシルト質の多い沖積土で水稲や玉ネギ、ナウマンゾウの化石が発掘されている一段高い河岸段丘のように見える氷河時代に形成された洪積土のなだらかな土地にはジャガイモや小麦、支笏湖火山の噴火により厚く堆積した火山灰が混じる腐葉土からなる南部地区では長イモやメロンというように。

かつて、夕張が炭鉱で栄えていたころ、夕張川の側で育った私は「川は黒いもの」と思っていた。戦前戦後を、石炭や食料増産のために水が使われ、汚れるままであった夕張川に清流が戻り、サケが72年振りに帰ってきた。

世の中の移り変わりの中で、その度ごと人間の都合にあわせて、何も言わず私たちに恩恵を与えてきてくれた夕張川に今、恩返しをしていくことが大事と思っている。

森と土と川と海をつなぐ水環境と生きものの循環をつくりだす人の暮らしと営みを整えていくことが必要と感じる。自然とともに暮らし、安心安全でおいしい農産物を再生産していく農村集落がもつかけがえのない意義の再構成とそこで暮す人々の誇りの構築なくして何も生まれえない。ふるさとの川を再生して、子どもたちが栗山で育ったことに誇りがもてる、豊かな農村・里山環境をつくって行きたい。



高橋 慎さん

誰もが認める自然博士。
子どもたちが誇りの持てるふるさとづくりを夢見ている。



国蝶オオムラサキ



さあ、これから味噌づくり



子どもブランドという名の食農教育

食を考える協議会（興部町）

酪農と漁業の町、興部町。

江戸時代に松前藩の漁場として支配された歴史ある場所。

この町で、経済活動までを盛り込んだ画期的な食農教育が行われている。

海、山、里の恵み多い興部町

青い海がどこまでも美しい。小高い丘に囲まれた興部町は、異色な地域だ。3世紀から13世紀まで、オホーツク文化という古代文化が栄えていたらしい。このオホーツク文化の担い手はオホーツク文化人と称され、特異な民族だった。海獣狩猟や漁労を中心とする生活を送っていたオホーツク文化人。興部町では、この文化人の住居遺跡が発見されるなど、今もその文化の痕跡をとどめている。

町の人口は約4,200人。農林漁の一次産業が盛んな町。農業は酪農中心。漁業は鮭、ホタテ、カニなど豊富な資源があり、広大な森を利用した林業も行われている。この歴史と文化が漂う一次産業の町の魅力子どもたちに知って欲しい。そんな

な思いから、今他にあまり例のない個性的な食農教育が行われている。

思いを形にする塾の開設

さかのぼること8年前。農水省において地域づくり活動に支援する事業が予算化された。この事業を活用し、「食を考える協議会」を設立。子どもたちに郷土への愛着を育む活動をスタートさせた。「子どもたちが自分たちの作ったものを販売すること。これは、教育的にも大変良いことだよ」。地元幼稚園の園長先生の後押しもあり、周囲の反対意見を押し切り、販売までを盛り込んだ食農教育のプログラムが出来上がった。子どもたちの活動の舞台は、『星火塾』という名の塾。『星火塾』という大きな看板が目立つこの場所に、毎月1



活動の場である『星火塾』



回、子どもたちの明るい声が響き渡る。

加工体験から子ども

ブランドの商品づくりへ

『星火塾』に参加する子どもたちは、小学3年生から6年生まで。町の広報誌や地元小学校などを通じて、毎年募集する。親御さんを中心に年々関心が高まっていて、常に15名前後の応募がある。そしていよいよ活動開始。まずは、加工体験に使う作物を自分たちでつくる。地元農家の農地を一部借りて、かぼちゃや、いもなどを栽培。子どもたちは慣れない農作業に悪戦苦闘だ。次に、加工体験。つくる物は、ジャム、チーズ、パン、ケチャップ、ソーセージ、ケーキ、味噌、かまぼこと幅広い。味噌づくり体験の一コマを紹介すると、まずは

協議会会長が、大豆について説明。「大豆は興部町では作られていません。皆が食べている大豆は他の町から来てるんだよ」から始まる。そして、メインで

ある味噌の仕込み。最後に、前の年につくった味噌で豆腐と油揚げの味噌汁を、メインディッシュとして大豆ハンバーグ、デザートはきなこもち。協議会のスタッフと一緒に子どもたちは大豆づくし料理を試食する。自分たちでつくった料理は余計に美味しい。子どもたちの満足そうな顔が覗く。

かまぼこづくりは昔から地元漁師に伝わるレシピ。オホーツクの海で採れたホッケを自分たちで三枚におろし、すり身をつくり、野菜を混ぜて揚げかまぼこにする。この活動を行っている協議会は、地元の主婦を中心として、教育関係者、行政、

一般業者などが参加したものの。様々な分野の人たちが、それぞれの強みを生かして団結して取り組む。協議会会長はこう語る。

「何もない興部ではなくて、こんなに豊かなものが沢山あるんだよ。大事にしなきゃいけない故郷だよ。ということ子どもたちに分かって欲しい。そして、その輪が大人にも伝わり、みんなが地域の豊かさを実感できるようになればいいと思う」。協議会のめざす目標は、子どもたちが作った商品のブランド化だ。ジャムなどが候補。『星火塾』のブランドで、子どもたちが自ら販売することを目指している。

北大マルシェの体験ツアー

北大では、毎年8月にマルシェが開かれる。昨年で6回を数える北大マルシェは、札幌近郊



子どもたちの元気な声が響く北大マルシェ

からも多くの人たちが訪れる。『星火塾』は、このマルシェに第2回目から参加している。「おこっぺキッズドッグ」250円。「おこっぺキッズジャム」250円。いかがですか。子どもたちの元気な売り込みの声が響く。「おこっぺキッズドッグ」は、子どもたちが焼いたパンに地元産のソーセージやチーズを挟んだもの。贅沢でとても美味しい。毎年、楽しみにしているリピーターもいるくらい。子どもたちは、商品の原価計算や販売価格の計算、現地での調理、接客、お金の管理などを全て行う。「興部は、自然が豊かでとても良いところですよ。食べ物も美味しいし、是非来て下さい」。小学5年生の女の子が、目を輝かせてお客さんにPRしていた。自分の町への愛着が確かに育っているようだ。子ども



北大農学部先生から牛の講義

たちの活動は、北大マルシェでの販売だけではない。北大農学部の先生から牛乳についての説明を受けたら、天使大学で食べ物の栄養について学ぶ。子どもたちにとっては一時の大学生。普段経験することができない専門的な講義に神妙な顔つきで向かっている。



慣れない接客も一生懸命頑張る子どもたち





リピーターが多い弁当づくり



おこっぺキッズジャムのラベルは子どもたちの手作り

未来につながる

Mammalia (マンマリア)

活動を将来にも継続していきたい。協議会では、活動費を生み出す取組として、パンや弁当、惣菜、焼き菓子の販売を始めた。毎週火曜日は、パンと弁当の販売日。この日を待ちわびた人たちが、開店と同時に訪れる。『星火塾』は元々チョココレートの製造販売会社の店舗であった所を借りていて、厨房と商品の販売スペースが併設されている。子どもたちの加工体験は厨房で。パンなどの販売は、販売スペースで行う。ここでスタッフとして働く高齢者は、社会の役に立てることをとても喜んでいる。パンや焼き菓子は、Mammalia (マンマリア) というブランド名をつけている。ラテン語で「ほ乳類」「乳房」など

を意味するこの言葉に、子どもたちや地域の人たちに、安心して食べて欲しいという思いが込められている。パンや焼き菓子には、興部の牛乳やチーズ、良質な生クリームを使用した発酵バターを使用。こだわりは無限大だ。

パンは、地元レストランや学校給食などへも提供。焼き菓子の評判は上々で、インターネット販売も計画している。地元ならではの食づくりと食農教育の活動費確保。協議会の活動はこれからもステップアップしていくことだろう。



Mammalia のロゴ



Mammalia ブランドのクッキー



素材にこだわったパン

地域リーダー からのひとこと

地域活動を通して考えること

食を考える協議会 会長 大黒 敦子

私は平成20年より、地域の仲間たちと食を考える協議会を結成し活動を続けてきました。地域が、年々元気がなくなるのを目の当たりにし、自分たちが住む地域が元気になる活動を、自らが主体となって考え、動くことが大切だと思っただけです。幸い、賛同者も現れ、行政や関係機関の協力も得られ活動を進めることができました。また、アドバイザーとして町外の有識者を得られたことも協議会の意思の疎通を図る上で有効なことでした。

私がこの活動を進める上で、気を付けたことは、行政任せにしないということ、町民主体、特に何の肩書もない主婦たちの力を前面に出していこう、自らが汗をかこうということでした。とはいっても、経験のない主婦だけではどうにもならず……。子どもたちの食育体験では、

地元の普及センターの指導員の方々、役場の専門職の方々の力をずいぶんとお借りしました。（今でもお借りしています）また、事務処理、会計処理等目の行き届かない部分を役場の方にはずいぶんフォローして頂いています。

活動を続け、いろいろな方たちと議論を重ねていくうちに、地域の活性化のためには、若者たちの力を前面に出していくことも必要なことだと思ふようになりました。星火塾の活動拠点となっている場所は、商店街のほぼ真ん中に位置しています。周囲には空き店舗が目立ち、人影もまばらな商店街になっていたことから、若者たちが中心となって秋の1日、商店街の空き店舗、空き地をお借りし商店街を歩きながら買い物や人とのふれあいを楽しむイベント「街中マルシェ」を開催することとなり、昨年5回目を開催



商店街の活気がよみがえる街中マルシェ



街中マルシェに合わせて、様々なイベントが開催された



街中マルシェを考えたスタッフたち

することができました。食を考える協議会では、国や道からの補助金をいただき、初期の活動に対して活用させていただきました。この期間で様々な方々と情報を交流することができ、また、協議会メンバーで先進地視察により勉強になったと同時にいろいろな刺激を受けました。それが自己の取組の励みとなりました。現在は補助金を受けず、星火塾生の負担（年間一人5千円）及び店舗販売の売り上げを財源として活動しております。ただ、補助金時代と比べると、他者との交流の機会や学習の機会が格段に減ってしまいました。そこが残念です。協議会の運営の中で一番難しいのが、立場や意識の違う人たちの気持ちを一つにして方向性をそろえることであり、時に、面倒に思い、省略することがあります。ただ、地域の問題を自分のこととしてとらえる人たちが一人でも多く仲間にいることが、そして議論ができることが重要なことだと思おうようになります。

面倒なことから逃げないこと、面倒に思うことを丁寧にトライしていくことが、問題解決の一番の近道なのかもしれませんが、私は、興部町内の漁家に生まれ、育ちました。同じ町内で酪農家に嫁いだため、学生時代の2年間と就職で町を離れた8年間以外、約半世紀をこの町で過ごしたことになります。これからも、余程のことがない限り、この町で暮らしつづけると思います。体の動く限り、コツコツと自分ができることを仲間たちと積み重ねていきたいと思っています。



大黒 敦子さん

「思った人がやるしかない。」
持ち前の明るさで、熱い活動を展開



説明を真剣に聞く子どもたち